

もらって変電所の隅に積んで置いたのを満人の責任者に全部みんなにくれてやるから先に持って帰って大連駅電気室の前の廣場に並べて置き、船が出たら電気のもとでスコンを切って帰ってクジをつくってやるからと云うと、よるこんで日本人電工共々帰りました。荷物が二〇個位で積み終る頃、輸送指揮官がタラップから降りたのでペンを腰に付けゲートルのまま荷物をかっいで乗船荷物の中にかくれました。船は三山島沖に来ると私の逃げるのを知って居られる熊本市の山田さん、九州大学出の牡丹江の電力課長、只一人知って居られ私を呼び外人は一人も居ないとの事で二人で事務長に一切話すと乗船名簿に記入してもらいました。君一人なら船員の手伝いをしてくれと云われ安心致しました。食事も船員と同じでよかったです。船中で三人ほど死亡され、埋葬には大きな石五個位つけて坊さんの読経が終ると滑り台から事務長の手でロープを切り水葬の手伝等して舞鶴港に無事上陸、お湯に入り身体検査も終り東京帰りは二五二人列車内世話人七人其中に私も入れられました。名古屋で食事を受取ったり、皆に配給したりする間に、小田原駅に

下車される大連満鉄電気工場長の岩竹松之助工学博士、後に芝浦工大の学長の家族の荷物十八個、全部私を知って居りましたので積み降しをしてやりました。昨年満鉄報でご死去遊ばされた由。列車は品川駅に到着、解散し、私は上野の神吉町の引揚者の寮に入りました。三か月間の食券と千円いただき、二十二年四月、川崎市役所交通局に就職、三十五年十二月満六〇歳で停年退職致しました。満鉄在職中生計課発行の主婦のお買物帳の演芸欄に俳句と短歌、私も俳句を出すと天位に当選致し賞金十円もらいました。題名は(蜂)でした。

人もかく見習え蜂の友かせぎ 光月

満州国総務長官秘書処員で

終戦帰国して

愛知県 山本茂三

渡満後の状況

私は、愛知県知事官房秘書課に勤務していたが遠藤知

事が政府の要請により、満州国総務長官に就任にともないその秘書処員として、渡満することになった。独身の二十四歳の時であった。

遠藤氏は、満州皇帝即位の大典を終え、第一回の皇帝訪日の大任を果たすと退任帰国されたが私は残った。敦化の満州電業発電所職員の満州生まれの満州育ちの日本人の娘と結婚し、二男一女をもうけた。

終戦前後から引揚まで

日本政府が昭和二十年四、五月頃から戦争終結の動きがあったことは承知していた。八月に入ると満系の友人などから、日本政府がポツダム宣言を受け入れる方向で動き出したとの情報を得た。

ソ連が参戦して、新京まで侵攻するであろうとのことで、八月十三日夜雨中に妻と子供達を無蓋車に乗せて疎開させることにした。安東から朝鮮経由で内地へ向かい南下するようにした。送り出した新京駅は日本人避難民が順番待ちでこた返しのまさにこの世の地獄であった。どうか家族を送り出し、心おきなく死ねると思った。

それから終戦処理の仕事に忙殺された。八月二十一日、

ソ連軍が入京し総務庁に来て、午後五時まで全員退庁との命令が下った。満州国の要人がつきつぎに逮捕され、私もその名簿にのっているとのことでその日のうちに流浪生活が始まった。北滿からの悲惨な姿での避難民は極度の疲労と栄養失調で、チフスなどで死亡者が続出した。やがて民間人で在留日本人善後処理委員会が結成され救済の手伝いをした。

十月末安東から家族がもどり全員そろった。ソ連兵がいつ押し入ってくるかも知れないので、出入り口を釘付けにしてヒッソリと呼吸をつめた暗黒の毎日が続いた。やがてソ連軍が市内から撤退したが、その後は、中央軍と八路军の新京争奪戦で市内が大戦場と化した。貨幣もソ連軍票、中央軍票、八路军票、満州国紙幣といりみだれ通用していた。貨幣価値も少々違って適正な値段で品物を買えないこともあった。

昭和二十一年春頃から引揚げが具体化してきて、先ず奥地からの避難民を最初にし、私達は八月に入って順番が来た。私の財産としての数々の品々や下賜の記念品、書画、それに貴重なアルバム等おしい気持ちで置いて命

からがら帰国するしか方法がなかった。列車に乗り、コ  
ロ島に着いたが出航まで何日かかるか見当もつかなかっ  
た。錦州集中収容所に一週間入り、米軍提供のLST船  
にやっと乗船し初めて一切の恐怖からのがれられ、私も  
初めて覆面をぬいだ。乗船後間もなく死亡した方の水葬  
が行われたが、何ともあわれと言うしかなかった。

#### 引揚後の状況

帰国後は、父の住む生家にやっとたどり着いた。途中  
の豊橋市街は空襲で焼け跡になっていた。豊橋市内から  
八キロ程離れた農村地帯にあった実家は無事で、昔のま  
まだった。

私は生家であるから何んの気がねもなかったが、内地  
暮らしが初めての妻は極度の緊張と食糧不足のうえ、父、  
兄夫婦子供五人のところへ私達五人がころがり込んだの  
だから気苦労もひとしおだったろう。

地元で就職の世話をしてくれる方もあったが一切断つ  
た。名古屋、東京などの旧友をたずね就職を頼んだが、  
占領下でどうにもならなかった。結局闇屋になった。闇  
物資製造もしたが武士の商法で金儲けに徹し切れなかつ

た。兄の骨折りで精米、製粉などの仕事を徹夜につく徹  
夜で頑張ったがそれ程の儲けにはならなかった。子供が  
重難病のため、蓄えもすぐ底をつき統制が緩和されるや  
大手企業の始動で、やっとの生活で細々と暮らしつづけ  
た。子供達の養育が精一杯で、老後のことにまで手が回  
らなかった。しかし、現在では子供達もそれぞれ独立し  
て事業に専念しているのがせめてもの慰めである。

朝から夜まで働きづめだったので、地域の役職など二  
十年間一切辞退していた。その後ボランティア的な仕事  
を引き受けたら次から次へと押しつけられ、現在二十を  
越す程になってしまった。逐次辞退しているところであ  
る。

妻は十年余りにわたり入退院のくり返して、私の助け  
を必要とし、老夫婦肩よせ合ってヒソソリと生活をして  
いる。

#### 結 び

我が青春をかけた満州時代の印象は強烈で今だに心の  
古里である。地位も栄誉も財産も総て空しいものだと身  
をもって体験した。乾坤之一劇場(劇中劇あり)で、満

州国の興亡も総て天地を舞台にした一コマだったのだ。

## 引揚者の体験記

山形県 高橋 三男

私は昭和九年四月、友人である当時満州国奉天市公署科長さんのご配慮により、かねて希望いたしておりました大陸満州に渡ることができました。当時はまだ治安状況も安定しない時期でしたが五族協和王道建設の理想に燃える若者が陸続として渡満する時でした。

渡満して友人宅に落ち着いた折、友人から新天地で生活するには言葉を覚えなければと言われ、開講されている満鉄八幡町の講習所の満州語科と簿記科に人所願いを出したところ許可されたので入所した。満州語は漢字だけが発音はなかなか難しい。しかし、張先生は真に丁寧に指導され、初心者としては大変だが月日がたつにつれ慣れてくるので、満人に話しかけてみると、「不明白（ブミンバイ）」と言われてがっかりしたものです。

三か月ばかり友人宅にお世話になってから、言葉を覚えるにはと思い立ち日本人の少ないほとんどない城内のアパートに住み、辞書を片手に満人との会話に励み、そのかいあって言葉も少しずつ通ずるようになった。簿記も日系の先生の指導を受けて九月には講習を終了した。終了と同時に、語学をもっと研修するため錦州の日本生業株式会社就職したが、三か月後に生業栽培の主任技師が事故のため死亡したので大連の本社事務所で残務整理に従事し、翌十年四月南満州鉄道株式会社白城子建設事務所に就職した。これは日本生業の主任技師の友人の紹介である。

そして、測量隊に所属し北満の広野に鉄道建設の第一線で青春を思いきり走り回った。満州に渡る前に結婚し一児の父であった私は、渡満の折、妻子を妻の生家に託したのだった。

昭和十一年四月から満鉄、鉄道総局福祉生計所素倫分所に転属したのを機会に内地から妻子を呼び寄せた。そして、昭和十三年十一月同所から阿爾山分所主任に転出し、更に同十五年九月ノモンハン事変終了後同所齊々哈